



映画雑感 4

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

史氏の日記に遺された構想を下敷きにした松永大司監督の意欲作。胃がんに侵された元美大生のフリーターが不思議な少女に出会い、最後は病院を抜け出してトイレにピエタを描いて死んでいきます。「知られざる傑作」を想起させる味わいがありました。

▼昨年6月から11月までに公開された邦画作品から。まず呉美保監督の「きみはいい子」。

児童虐待という重いテーマでありながら、様々な事情を抱えた加害者と被害者の双方が僅かなきっかけから光を見出していく過程を丁寧に、そして真摯な眼差しで映像化。子役たちの自然な姿とそれに触発されたかのような大人たちの演技によって好ましい作品に仕上がっています。「トイレのピエタ」は手塚治

▼「愛を積むひと」はアメリカの小説「石を積む人」を北海道美瑛に舞台を移して映画化。北国の厳しい自然が違和感のない物語を紡いでいます。妻の願いを受け入れて移住した初老の元工場主は、亡き妻からの手紙と、石を積むという行為を通じて、行き場のない若者を立ち直らせ、自らも再生していきます。

▼今年は戦後70年の節目とあって戦争と戦後を振り返る映画も幾つか制作されました。そ

の中で戦時下の市民の暮らしと心情をリアルに描いた「この国の空」は、70年の時を経て生まれた新しいタイプの戦争映画と言えるでしょう。ひたすら日常を追う中で、戦争がいかに人間の日常生活を蝕み破壊していくのか、淡々と浮かび上がらせていきます。「アットホーム」の仲良し家族は実は詐欺師の男女と家族に捨てられた子供たちが肩を寄せ合う疑似家族。幸せを求めて奮闘する一家はやがて危機に陥ります。嘘の上に成立している家族のあり様が家族の本質を気づかせます。

▼「ポプラの秋」と「岸辺の旅」。秀作「夏の庭」と同じ湯本香樹美の小説の映画化作品。「ポプラの秋」では心を病んだ母と田舎に来た少女は、大家の厳しい老女との交流を通じ

て人間として成長していきます。本田望結と中村玉緒の真剣勝負は見応え十分。一方、「岸辺の旅」は旅先で死んだ夫と旅に出る妻が夫の最後の数カ月に関わった人たちと触れ合うことで、真の別れを受け入れます。黒沢清監督が不思議ではあっても真実味に溢れた優しい世界を紡いで、カンフ映画祭の「ある視点部門」監督賞を受賞しました。

▼「起終点駅」は、元恋人の死をきっかけに職も家族も捨てて逼塞する初老の弁護士が、覚醒剤使用に問われた若い女性を救う過程で自ら捨てた息子との絆を取り戻します。弁護士が成り行きで女性に振る舞う手料理が映画に興行きを与えています。はからずも「再生」テーマの作品が目付いた半年間でした。